玉川の草

泉鏡花

青空文庫

——これは、そゞろな秋のおもひでである。青葉の雨を聞きながら——

露を其のまゝの女郎花、浅葱の優しい嫁菜の花、藤袴、また我亦紅、はよく伸び、よく茂り、慌てた蛙は、蒲の穂と間違へさうに、（我こそ）と咲いて居る。——添へて刈萱の濡れたのは、蓑にも織らず、折からの雨の姿である。中に、千鳥と名のあるのは、蕭々たる夜半の風に、野山の水に、虫の声と相触れて、チリチリ鳴りさうに思はれる……その千鳥刈萱。——通称はツリガネニンジンであるが、色も同じ桔梗を薄く絞つて、俯向けにつら〳〵と連り咲く紫の風鈴草、或は曙の釣鐘草と呼びたいやうな草の花など——皆、玉川の白露を鏤めたのを、——其の砧の里に実家のある、——町内の私のすぐ近所の白井氏に、殆ど毎年のやうに、土産にして頂戴する。

其年も初秋の初夜過ぎて、白井氏が玉川べりの実家へ出向いた帰りだと云って、——夕立が地雨に成つて、しと〳〵と降る中を、まだ寝ぬ門を訪れて、框にしつとりと置いて、帰んなすつた。

慣れても、真新しい風情の中に、其の釣鐘草の交つたのが、わけて珍らしかつたのである。

鏑木清方さんが——まだ浜町に居る頃である。塵も置かない綺麗事の庭の小さな池の縁に、

手で一寸劃られるばかりな土に、紅蓼、露草、蚊帳釣草、犬ぢやらしなんど、雑草なみに扱はるゝのが、野山路、田舎の状を髣髴として、秋晴の薄日に乱れた中に、――其の釣鐘草が一茎、丈伸びて高く、すつと咲いて、たとへば月夜の村芝居に、青い幟を見るやうな、色も灯れて咲いて居た。

遣水の音がする。……

萩も芙蓉も、此の住居には頒かれるが、縁日の鉢植を移したり、植木屋の手に掛けたものとは思はれない。

「あれは何うしたのです。」

と聞くと、お照さん――鏑木夫人――が、

「春ね、皆で玉川へ遊びに行きました時、――まだ何にも生えて居ない土を、一かけ持つて来たんですよ。」

即ち名所の土の傀儡師が、箱から気を咲かせた草の面影なのであつた。

さら〳〵と風に露が散る。

また遣水の音がした。

金をかけて、茶座敷を営むより、此の思ひつき至つて妙、雅にして而して優である。

……其の後、つくし、餅草摘みに、私たち玉川へ行つた時、真似して、土を、麹一枚ばかりと、折詰を包んだ風呂敷を一度ふるつては見たものの、土手にも畦にも河原にも、すく〳〵と

皆気味の悪い小さな穴がある。――釣鐘草の咲く時分に、振袖の蛇体なら好いとして、黄頷蛇が、によろによろ、などは肝を冷すと何だか手をつけかねた覚えがある。

「何を振廻はして居るんだな、早く水を入れて遣らないかい。」

でん〳〵太鼓を貰へたやうに、馬鹿が、嬉しがつて居る家内のあとへ、私は縁側へついて出た。

「これですもの、どつさりあつて……枝も葉もほごしてからでないと、何ですかね、蝶々が入つて寝て居さうで……いきなり桶へ突込んでは気の毒ですから。」

へん、柄にない。

フヽンと苦笑をする処だが、此処は一つ、敢て山のかみのために弁じたい。

秋は、これよりも深かつた。――露の凝つた秋草を、霜早き枝のもみぢに添へて、家内が麹町の大通りの花政と云ふのから買つて帰つた事がある。

……其時、おや、小さな木兎、雑司ヶ谷から飛んで来たやうな、木葉木兎、青葉木兎とか称ふるのを提げて来た。

手広い花屋は、近まはり近在を求るだけでは間に合はない。其処で、房州、相模はもとより、甲州、信州、越後あたりまで――持主から山を何町歩と買ひしめて、片つ端から鎌を入れる。

朝夕の風、日南の香、雨、露、霜も、一斉に貨物車に積込むのださうである。――其年活けた最初の錦木は、奥州の忍の里、竜胆は熊野平碓氷の山岨で刈りつゝ下枝を透かした時、昼の半輪の月を裏山の峰にして、ぽかんと留まつたのが、……其の木兎で。

若い衆が串戯に生捉つた。

こんな事はいくらもある。

「洒落に持つてつて御覧なせえ。」と、花政の爺さんが景ぶつに寄越したのだと言ふのである。

げに人柄こそは思はるれ。……お嬢さん、奥方たち、婦人の風采によつては、鶯、かなりや、……せめて頬白、※子鳥ともあるべき処を、よこすものが、木兎か。……あゝ人柄が思はれる。

が、秋日の縁側に、ふはりと懸り、背戸の草に浮上つて、傍に、其のもみぢに交る樫の枝に、団栗の実の転げたのを見た時は、恰も買つて来た草中から、ぽつと飛出したやうな思ひがした。

いき餌だと言ふ。……牛肉を少々買つて、生々と差しつけては見たけれど、恁う、嘴を伏せ、翼をすぼめ、あとじさりに、目を据ゑつゝ、あはれに悄気て、ホ、と寂しく、ホと弱く、ポポーと真昼の夢に魘されたやうに鳴く。

その真黄な大きな目からは、玉のやうな涙がぽろ〳〵と溢れさうに見える。山懐に抱かれた稚い媛が、悪道士、邪仙人の魔法で呪はれでもしたやうで、血の牛肉どころか、吉野、竜田の、彩色の菓子、墨絵の落雁でも喙みさうに、しをらしく、いた〳〵しい。

……その菓子の袋を添へて、駄賃を少々。特に、もとの山へ戻すやうに、と云つて、花屋の

店へ返したが。——まつたく、木の葉草の花の精が顕はれたやうであつた。

こゝに於て、蝶の宿(やどり)を、秋の草にきづかつたのを嘲(あざけ)らない。

「あゝ、ちら〳〵。」

手にほごす葉を散つて、小さな白いものが飛んだ。障子をふつと潜(くぐ)りつゝ、きのふ今日蚊帳を除つた、薄掻巻(うすかいまき)の、袖に、裾に、ちら〳〵と舞ひまうたのは、それは綿よりも軽い蘆の穂であつた。

（大正十三年十月）

青空文庫情報

底本：「花の名随筆10　十月の花」作品社
　　1999（平成11）年9月10日初版第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第二十七巻」岩波書店
　　1942（昭和17）年10月
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：門田裕志
校正：林　幸雄
2002年1月28日公開
2005年11月23日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

玉川の草

泉鏡花

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/